

音楽系部活動に所属する高校生の部活動適応感測定尺度作成の試み[†]

佐川 馨*

秋田大学教育文化学部

本研究は、音楽系部活動に所属する高校生を対象とした「適応感」「顧問の指導」「音楽観」を測定する尺度を作成し、結果の分析を通して音楽系部活動の指導の改善に資することを目指した。A県内の吹奏楽部、合唱部に所属する高校1,2年生288名(男子46名,女子242名)に質問紙調査を実施した結果、適応感尺度では「向上心」「居心地のよさ」「顧問とのかわり」「人間関係」「部活動からの逃避」の5因子が、顧問の指導尺度では「親しみやすさ」「しつけと厳しさ」「指導のうまさと情熱」の3因子が、音楽観尺度では「音楽の有用性」「コンクールとしての音楽」「音楽の価値」の3因子がそれぞれ見出された。下位尺度の考察から、①部活動以外の音楽経験がある部員は部活動への適応感が高いこと、②指導する顧問の親しみやすさや指導力、教育的情熱、教育的厳しさは相即不離の関係にあり、バランスのよい指導が生徒の共感につながるなどが明らかとなった。

キーワード：音楽系部活動、高校生、部活動、適応感、因子分析

1 問題と目的

部活動は、教科、道徳、特別活動、総合学習といった教育課程に含まれる教育活動ではなく、生徒たちが放課後や休日を利用して自主的に取り組む「課外活動」であるが、その学校教育における有用性については、いまさら強調するまでもなく、部活動を通しての教育実践は協調性や社会性の涵養といった教科の学習だけではなし得ない様々な成果を生み出してきた。

部活動に所属する多くの中学生や高校生にとって、また指導にあたる多くの教員にとっても部活動は学校生活の中核となっており¹、学校側にとっても部活動の成績は自校の教育方針や教育成果を対外的に周知させる格好の場となる。しかしその一方で、勝利至上主義による過重な練習や、その結果として生ずる生徒の学習や教員の勤務への影響など、看過できない様々な問題があることも確かである。

文部科学省の『運動部活動の在り方に関する調査研究報告』²では、顧問の指導上の悩みとして、中学校、高等学校とも「校務が忙しくて思うように指導できない」(中学校58.2%,高等学校55.1%)ことが第1位となっており、多忙な校務との両立に悩む姿が浮き彫りとなっている。また、「自分の研究や自由な時間等の妨げになっている」(中学校26.2%,高等学校20.4%)として、十分な教材研究や生活の時間の確保が困難であるという現状にある。生徒についても「疲れがたまる」(中学生28.9%,高校生32.8%),「遊んだり勉強する時間がない」(中学生25.4%,高校生32.1%)と、指導する顧問と同様の状況にある。

小・中学校では2002年度から、高等学校では2003年度から施行されている現行の学習指導要領の改訂に伴い必修クラブが廃止され、部活動の地域への移行が検討されるなど、問題解決のための試みはなされてきたが、大きな改善はみられないようである。

これらの問題解決のために、部活動についての様々な研究がなされてきたが、これまでの研究を概観すると、運動部を対象とした学校教育における有用性と適応に関する論考が多くみられる。

2008年1月28日受理

[†]An Attempt to Construct Scales of Adaptability to Club Activities for the Members of Music Clubs in High Schools

*Kaoru SAGAWA, Faculty of Education and Human Studies, Akita University, Akita

学校教育における有用性については、たとえば青木³が、高校運動部員が無所属や文化部部員よりも社会的スキルが高いこと、また、運動部活動における部活動適応感が有能感と学校生活適応感に影響を及ぼすことを明らかにし、運動部活動が社会的スキルを育成する活動として重要であるとしている。

角谷⁴は、中学生を対象にした質問紙調査の分析から、部活動における積極的な活動が学業よりも学校生活の満足感の高さに強く関連し、部活動における積極性が学業コンピテンスの高まりにつながると指摘している。

学校教育における適応の視点からは吉村⁵が、部活動の満足感は主将との人間関係によって規定され、自己表現・主張できる力の育成が、部活動だけではなく学校生活全体への適応に反映されるとしている。この研究は教員と生徒との関係についてのものではないが、顧問の指導と生徒との関係についても示唆を与えるものである。

桂、中込⁶は運動部活動における適応感を規定する要因として「部内における自己有能感」「部の指導者・運営」「制約・束縛感」「種目・部活動へのコミットメント」「対チームメイト感情」の五つを明らかにした上で、発達段階による影響度の相違が存在することを指摘している。

このように運動部を対象にした先行研究は、学校教育における部活動の意義や効用を示すとともに、部活動を巡る諸問題の解決に資する様々な知見を提供してきた。

さて、音楽系部活動は、吹奏楽、合唱、管弦楽、邦楽、軽音楽などがある。そのうち最も活発な活動を展開しているものは吹奏楽であろう。吹奏楽に所属する部員は全国的にみても多く、2007年10月1日現在における全日本吹奏楽連盟加盟校⁷は、小学校1079校（全小学校の4.75%）、中学校7058校（64.42%）、高等学校では3781校（71.17%）である⁸。

学校吹奏楽は学校行事や儀式で不可欠のものであり、地域における音楽文化の中核的な存在となっている例も珍しくない。また、社会人を主体とした吹奏楽活動も盛んであり、その意味では学校教育のみならず、生涯学習の面からの有用性も認められる。

一方、合唱部は中学校789校、高等学校843校と、吹奏楽には及ばないが、昭和7年には日本教育音楽協会の創立10周年記念事業として現在のNHK全国学校音楽コンクールの前身である「第1回児童唱歌

コンクール」が開催されるなど、早くから学校教育や音楽教育の世界で果たしてきた役割は大きい⁹。

しかし、音楽系部活動においても運動系の部活動と同様の問題がある。筆者はかつて高校の教育現場で吹奏楽の指導にあたった経験がある。勤務校が、いわゆる吹奏楽の名門校であったため、コンクールの実績を上げることが何よりも求められた。また生徒や父兄も高校生活の目的を部活動に求めているケースが多く、コンクールの勝利のために練習量は必然的に多くなり、本来の職務である授業の準備や教材研究をする時間の確保も難しい状況であった。生徒も同様であり、教科の学習や進路の準備など、学校生活と部活動の両立ができていたとは言い難い例も多くみられた。

これらの問題を解決するためには、音楽系部活動についても様々な視点からの研究が必要となる。しかし吹奏楽に関する研究は、その大半が楽器の奏法や演奏指導にかかわるものであり¹⁰、指導の改善の手立てを生徒の適応感から捉えるという視点からの研究は管見の限りではみられない。

そこで本研究では、以上のような状況を踏まえ、音楽系部活動の適応感測定尺度の作成を試みる。加えて、顧問の指導測定尺度と音楽系部活動部員に特有の音楽観についても調査し、それらの結果を考察する中から音楽系部活動の指導の改善に資するための示唆を得ることを目的とする。

前述のとおり音楽系部活動は、吹奏楽、合唱、管弦楽、邦楽、軽音楽などがあるが、学校教育においては吹奏楽と合唱がその大半を占めること、また調査地域の事情を考慮し、この研究では調査の対象は吹奏楽部と合唱部の二つに限定した。

部活動にかかわる研究は、体育系部活動のみならず音楽系部活動においても取り込まれるべき分野である。本研究の成果を音楽系部活動における諸問題を体系的に研究していくための端緒としたい。

2 方 法

2.1 調査対象

調査対象者はA県内9高校の吹奏楽部、合唱部に所属する1,2年生288名（男子46名、女子242名）であった。そのうち吹奏楽部は234名（男子40名、女子194名）、合唱部は54名（男子0名、女子54名）であった。

調査校の選定にあたっては、A県内を三つの地

域に分け、過去3年間の部員数の推移とコンクール実績をもとに11校を選定し、各学校に協力を依頼した。その結果、9校からの受諾を得ることができた。しかし、そのうち1校からは質問紙2の内容が部活動の運営上好ましくない影響を与える恐れがあるとの理由から回答を得られなかった。したがって、質問紙2については254人の調査票の回収であった。調査対象者の学校別の内訳は、下表のとおりである。

表1 調査対象者の内訳

学校	男	女	計
A	2	32	34
B	15	17	32
C	4	14	18
D	0	33	33
E	7	49	56
F	12	21	33
G	0	17	17
H	6	35	41
I	0	24	24
計	46	242	288

2.2 調査用紙の作成

本研究で用いた調査用紙は、基本的属性、部活動適応感測定尺度、顧問の指導測定尺度、音楽観測定尺度から構成されている。

基本的属性：性別、学年、吹奏楽部・合唱部の別、パート（担当楽器）、中学校での部活動歴、部活動以外の音楽の習い事の有無、その期間と内容。

①**部活動適応感測定尺度：**仲間や顧問とのかかわり、活動の満足感などを測定するために、筆者および大学院生2名が自身の中学、高校時代の部活動の経験に基づいて自由記述し、KJ法を用いて整理したものに加え、吉村¹¹、青木¹²の部活動適応感測定尺度を参考に31項目を作成した。各項目については「まったくそう思わない」から「とてもそう思う」までの5点尺度法で回答させた。

②**顧問の指導測定尺度：**顧問の指導スタイルを測定するために、坂西¹³、吉村¹⁴のリーダーシップ測定尺度を参考に、生活指導、技術指導、音楽の力量など35項目を作成した。各項目については「まったくそう思わない」から「とてもそう思う」までの5点尺度法で回答させた。

③**音楽観測定尺度：**音楽系部活動に所属する高校生に特有の音楽への見方や考え方を測定する尺度とし

て、筆者および大学院生2名が音楽観を自由記述し、KJ法によって整理したものに加え、青木¹⁵のスポーツ観測定尺度を参考に音楽系部活動に合うように検討し、27項目を作成した。各項目については「まったくそう思わない」から「とてもそう思う」までの5点尺度法で回答させた。

2.3 予備調査

本調査に先立って予備調査を行い、内容的妥当性を確認した。対象は音楽教育を専攻する大学1年から3年生24名（男3名、女21名）であった。それぞれの項目についての5段階での評価と自由記述を併用し、不適当な記述のある項目は修正、削除した。

2.4 調査の実施

調査は2007年12月の第3週から4週にかけて、自記式質問紙調査票による集合調査法で各校の部活動顧問によって実施された。調査の実施にあたっては、詳細な実施マニュアルを作成し、顧問に関する質問の回答などに歪みが生じないように、個人が特定されないこと、顧問は回答を見ないことを述べるなど、実施マニュアルにそって進めてもらえるよう特別の配慮をお願いした。

3 結果

3.1 部活動適応感測定尺度の分析

3.1.1 因子分析結果

全対象288名のうち、空白のある3名を除き、285名を有効回答とした。結果の分析にあたってはSPSS14.0 for Windowsを使用し、それぞれの質問の回答に対して1点から5点の得点を与え逆転項目の処理をした上で、平均値と標準偏差を求めた。そして天井効果の見られた7項目を除外し、残りの24項目に対して主因子法による因子分析を行った。

固有値の減衰状況と因子解釈の可能性から5因子構造が妥当であると考えられた。そこで再度5因子を仮定して主因子法・バリマックス（Varimax）回転による因子分析を行った。その結果、因子負荷量の絶対値.40以下や複数の因子の負荷量が同程度になる3項目を分析から除外し、再度、主因子法バリマックス回転による因子分析を行った（表2）。

第1因子は、「他の部員よりも上手になろうと努力している」「部員の誰よりも上手になりたい」「自分の技術向上のために努力している」など、努力や

技術向上にかかわる項目が高い負荷量を示していた。そこで「向上心」と命名した。

第2因子は、「クラスにいるよりも部の方が居心地がよい」「同じ部の友だちといえるのが楽しい」など、部活動における居心地のよさや快適さを表す項目からなるので、「居心地」と命名した。

第3因子は、「顧問と一緒に練習できることが楽しい」など、顧問とのかかわりに関する項目からなっており、「顧問とのかかわり」因子と命名した。

第4因子は、「他の部員とうまくいかない（逆転項目）」「部の先輩とうまくいかない（逆転項目）」など、友人や先輩とのかかわりに関する項目からなっており、「人間関係」因子と命名した。

第5因子は、「練習が厳しくてついていけない（逆転項目）」「辞めたいと考えることがある（逆転項目）」「この部は自分に向いていないと感じる（逆転項目）」など、居心地のよさや人間関係の快適さとは反する項目からなっており、「部活動からの逃避」因子と命名した。

3.1.2 下位尺度間の関連

因子分析の結果から抽出した五つの下位尺度に相当する項目の平均値を求め、「向上心」得点（平均3.57, SD 0.75）, 「居心地」得点（平均3.21, SD 0.87）, 「顧問とのかかわり」得点（平均3.09, SD 0.92）, 「人間関係」得点（平均3.79, SD 0.74）, 「部活動からの逃避」得点（平均3.25, SD 0.74）とした（表3）。

内的整合性を検討するために各下位尺度の信頼性を求めたところ、Cronbachの α 係数は、第1因子が $\alpha = .75$, 第2因子が $\alpha = .78$, 第3因子が $\alpha = .78$, 第4因子が $\alpha = .69$, 第5因子が $\alpha = .73$ であった。第4因子の値は高いとはいえないが、一定の信頼性は保証された。

3.1.3 吹奏楽部、合唱部の差の検討

吹奏楽部、合唱部の差を検討するために各下位尺度得点について t 検定を行った。その結果、因子I「向上心」下位尺度（ $t(285) = 1.75$, $n.s.$ ）, 因子II

表2 部活動適応感測定尺度の因子分析結果

音楽系部活動適応感尺度の項目	因子					共通性	
	向上心	居心地	顧問	人間関係	逃避		
他の部員よりも上手になろうと努力している。	.72	.04	.09	.01	.15	.55	
部員の誰よりも上手になりたい。	.68	.01	.02	.00	-.04	.47	
部活動に関係する本をよく読む。	.62	.16	-.04	-.14	.02	.43	
部活動中以外でも自分の技術向上のために努力をしている。	.54	.10	.09	.15	.17	.37	
部活動の時間以外の時でも、部活動のことを考えることがある。	.49	.38	.02	.22	-.11	.44	
クラスにいるよりも部の方が居心地がよい。	.10	.85	.16	.09	.08	.77	
クラスの友だちよりも同じ部の友だちといえる方が楽しい。	.11	.74	.10	-.01	.06	.58	
部活動の時間が来るのが待ち遠しい。	.39	.48	.23	.13	.29	.54	
顧問と一緒に練習できることが楽しい。	.15	.27	.78	.14	.14	.74	
部の顧問は自分の個性を理解してくれる。	.13	.12	.69	.15	-.02	.53	
顧問の指導方法に疑問をもつことがある。（*）	-.07	.03	.68	.24	.12	.54	
他の部員とうまくいかない。（*）	.00	.03	.06	.65	.15	.45	
自分の所属する部活動はまともがないと思う。（*）	-.13	.05	.35	.58	.06	.48	
仲間は自分の個性を理解してくれる。	.13	.10	.18	.51	.09	.32	
部の先輩とうまくいかない。（*）	.00	.00	.08	.49	.30	.34	
練習が厳しくてついていけないと思うことがある。（*）	.09	.03	-.15	.21	.56	.39	
部活動を辞めたいと考えることがよくある。（*）	.14	.26	.13	.26	.51	.43	
学校の勉強と両立することが難しいと感じることがある。（*）	-.11	-.09	.05	-.02	.47	.25	
放課後は部活動よりも友だちと遊んでいる方が楽しい。（*）	.21	.33	.11	.20	.46	.41	
この部（行っている練習、担当楽器など）は自分に向いていないと感じることがある。（*）	.13	.16	.20	.20	.46	.33	
部活動にきても楽しくない。（*）	.23	.26	.25	.40	.45	.58	
（*）は逆転項目	因子寄与	2.52	2.30	2.29	2.28	1.72	11.11
	寄与率	10.09	9.19	9.17	9.13	6.88	44.45

表3 下位尺度得点の平均値とSD, α 係数

	向上心	居心地	顧問	人間関係	逃避	平均	SD	α
向上心	-	.40 **	.15 **	.07	.25 **	3.57	0.75	.75
居心地		-	.36 **	.21 **	.43 **	3.21	0.87	.78
顧問			-	.40 **	.33 **	3.09	0.92	.78
人間関係				-	.45 **	3.79	0.74	.69
逃避					-	3.25	0.74	.73

** $p < .01$

「居心地」下位尺度 ($t(285)=1.74, n.s.$), 因子V「部活動からの逃避」下位尺度 ($t(285)=1.35, n.s.$) については, 吹奏楽部と合唱部の得点差は有意ではなかった. 因子III「顧問とのかかわり」下位尺度 ($t(285)=5.72, p < .001$), 因子IV「人間関係」下位尺度 ($t(285)=4.46, p < .001$) については, 吹奏楽部よりも合唱部の方が有意に高い得点を示していた(表4).

表4 所属別の平均値とSD, t 検定の結果

	吹奏楽		合唱		t 値
	平均	SD	平均	SD	
向上心	3.54	.74	3.76	.80	1.75
居心地	3.18	.88	3.44	.80	1.74
顧問	2.98	.89	3.84	.76	5.72 ***
人間関係	3.72	.72	4.27	.68	4.46 ***
逃避	3.23	.73	3.40	.79	1.35

*** $p < .001$

3.1.4 男女差の検討

男女差を検討するために, 各下位尺度得点について t 検定を行った. その結果, 因子I「向上心」下位尺度 ($t(285)=0.29, n.s.$), 因子II「居心地」下位尺度 ($t(285)=0.13, n.s.$), 因子III「顧問とのかかわり」下位尺度 ($t(285)=1.21, n.s.$), 因子V「部活動からの逃避」下位尺度 ($t(285)=1.01, n.s.$) については, 男女別の得点差は有意ではなかった. 因子IV「人間関係」下位尺度 ($t(285)=4.49, p < .001$) については男子よりも女子の方が有意に高い得点を示していた(表5).

3.1.5 音楽経験の差の検討

ピアノや電子オルガンなどの部活動以外の音楽の習い事の経験による下位尺度得点の差は, 因子I「向上心」下位尺度 ($t(285)=0.28, n.s.$), 因子II「居心地」下位尺度 ($t(285)=0.20, n.s.$), 因子III「顧問とのかかわり」下位尺度 ($t(285)=0.94, n.s.$)

表5 男女別の平均値とSD, t 検定の結果

	男子		女子		t 値
	平均	SD	平均	SD	
向上心	3.54	.83	3.57	.74	0.29
居心地	3.20	.97	3.21	.86	0.13
顧問	2.94	.91	3.12	.92	1.21
人間関係	3.36	.84	3.88	.69	4.49 ***
逃避	3.15	.67	3.27	.75	1.01

*** $p < .001$

については有意ではなかった.

しかし, 因子IV「人間関係」下位尺度 ($t(285)=1.56, n.s.$) については有意傾向がみられ, また, 因子V「部活動からの逃避」($t(285)=2.10, p < .05$) については, 習い事の経験のある方が有意に高い得点を示した(表6).

表6 音楽経験の違いによる平均値とSD, t 検定の結果

	習い事あり		習い事なし		t 値
	平均	SD	平均	SD	
向上心	3.58	.73	3.56	.77	0.28
居心地	3.20	.84	3.22	.90	0.20
顧問	3.04	.93	3.14	.91	0.94
人間関係	3.87	.76	3.73	.71	1.56
逃避	3.35	.75	3.16	.72	2.10 *

* $p < .05$

3.2 顧問の指導測定尺度の分析

3.2.1 因子分析結果

回答の得られなかった1校を除き254名を有効回答とした. 結果の分析にあたっては, それぞれの質問の回答に対して1点から5点の得点を与え, 逆転項目の処理をした上で平均値と標準偏差を求め, 天井効果もフロア効果もみられなかった34項目に対して主因子法・プロマックス (Promax) 回転による因子分析を行った. 各因子を代表する項目は, 回転後の因子負荷量が.40以上で, かつ複数の因子の負荷量が同程度になるものを除外し, 最終的に29項目からなる3因子を抽出した(表7).

第1因子は, 「気軽に相談できる」「親身になって相談できる」「励ましてくれる」「私の個性を理解してくれる」などからなっており, 「親しみやすさ」因子と命名した.

第2因子は, 「服装や頭髪をきちんとする」「校則を守る」「挨拶や言葉遣いなど礼儀について」「練習態度」「部活動だけでなく勉強も」など音楽以外の

表7 顧問の指導測定尺度の因子分析結果

顧問指導測定尺度の項目	親しみ	しつけ	指導情熱	
部活動以外のことでも気軽に相談できる先生だ。	.82	-.04	-.04	
部に関係のないことでも親身になって相談にのってくれる。	.79	.08	-.01	
時には家庭のことについても相談にのってくれる。	.79	.04	-.13	
勉強や進路のことなどについても相談にのってくれる。	.73	.11	-.07	
落ち込んでいるときなど励ましてくれる。	.72	.09	-.02	
部活動中の雰囲気が悪い時はときほぐそうとしてくれる。	.67	-.08	.09	
部員間でもめごとがあったりすると解決しようとしてくれる。	.56	.01	.15	
時々、近寄りたがたい雰囲気がある。(*)	.49	-.25	.01	
部員一人一人のことを考えてくれる。	.47	.22	.25	
練習や演奏会で失敗しても励ましてくれる。	.43	-.30	.24	
私の個性を理解してくれている。	.42	.26	.15	
部員に対して感情的に怒ったりすることがある。	-.10	.87	-.21	
部員に対して厳しく注意をしたりすることがある。	-.18	.86	.09	
部員が練習に無断で欠席をしたり遅刻をしたりすると注意する。	.13	.83	-.22	
部員に対して挨拶や言葉遣いなど礼儀について指導することがある。	-.15	.66	.25	
部員に対して服装や頭髮をきちんとするよう指導する。	-.09	.65	.14	
部員に対して校則を守るように指導することがある。	.09	.61	-.09	
部員の練習態度が悪いと注意する。	-.11	.57	.17	
部員に対して部活動だけでなく勉強も頑張るよう指導する。	.15	.56	-.19	
先生の練習方法や計画が悪くて時間が無駄になることがある。(*)	-.09	-.29	.80	
先生は、丁寧に分かり易く指導してくれる。	.22	-.13	.70	
計画的に練習を進める。	.03	.09	.69	
先生は、練習内容や計画をきちんと連絡する。	-.05	.12	.68	
音楽的解釈に納得できないことがある。(*)	.02	-.20	.64	
部員の技術向上のためには努力を惜しまない。	.11	.15	.64	
出来ないところを粘り強く教えてくれる。	.10	.13	.63	
よい演奏をするとほめてくれる。	-.03	.17	.56	
音楽のことでは妥協しない。	-.05	.03	.51	
部活動だけでなく何事にも一生懸命だ。	.13	.16	.51	
(*)は逆転項目	因子間相関	I	II	III
	I	—	.54	.68
	II	.54	—	.54
	III	.68	.54	—

基本的な生活習慣や人間として守るべきことに関するものと、「感情的に怒る」「厳しく注意する」「指導する」など、厳格な指導に関するものから構成されており、「しつけと厳しさ」因子と命名した。

第3因子は、「計画的に練習を進める」「丁寧に分かり易く指導する」「粘り強く教えてくれる」「部員の技術向上のために努力を惜しまない」「何事にも一生懸命だ」からなっており、練習の計画性や指導の巧拙、教育的情熱に関する項目からなっており、「指導のうまさと情熱」因子と命名した。

3.2.2 下位尺度間の関連

因子分析の結果から抽出した三つの下位尺度に相当する項目の平均値を求め「親しみやすさ」得点(平均2.85, *SD* 0.74), 「しつけと厳しさ」得点(平均3.61, *SD* 0.84), 「指導のうまさと情熱」得点(平均3.54, *SD* 0.76)とした。三つの下位尺度は互いに有意な正の相関を示した。内的整合性を検討するために各下位尺度の信頼性を求めたところ、Cronbachの α 係数は、第1因子が $\alpha = .90$, 第2因子が $\alpha = .87$, 第3因子が $\alpha = .89$ となっており、十分な信頼性は保証された(表8)。

表8 顧問の指導下位尺度間相関

	親しみ	しつけ	指導情熱	平均	SD	α
親しみ	-	.47 **	.69 **	2.85	0.74	.90
しつけ		-	.47 **	3.61	0.84	.87
指導情熱			-	3.54	0.76	.89

** $p < .01$

3.2.3 吹奏楽部、合唱部の差の検討

吹奏楽部、合唱部の差を検討するために各下位尺度得点について t 検定を行った。その結果、因子 I 「親しみやすさ」下位尺度 ($t(254)=2.64, p < .01$)、因子 III 「指導のうまさと情熱」下位尺度 ($t(254)=13.40, p < .001$) については、吹奏楽部よりも合唱部の方が有意に高い得点を示していた。因子 II 「しつけと厳しさ」下位尺度 ($t(254)=1.95, n.s.$) についても合唱部の得点が高く、有意傾向にあった (表9)。

表9 所属別の平均値と SD, t 検定の結果

	吹奏楽		合唱		t 値
	平均	SD	平均	SD	
親しみ	2.80	.75	3.14	.62	2.64 **
しつけ	3.56	.85	3.85	.75	1.95
指導情熱	3.38	.70	4.43	.39	13.40 ***

** $p < .01$ *** $p < .001$

3.2.4 男女差の検討

男女差を検討するために、各下位尺度得点について t 検定を行った。その結果、因子 I 「親しみやすさ」下位尺度 ($t(254)=0.88, n.s.$)、因子 II 「しつけと厳しさ」下位尺度 ($t(254)=1.60, n.s.$)、因子 III 「指導のうまさと情熱」下位尺度 ($t(254)=1.86, n.s.$) のいずれの因子について有意な差はみられなかった (表10)。

表10 男女別の平均値と SD, t 検定の結果

	男子		女子		t 値
	平均	SD	平均	SD	
親しみ	2.95	.75	2.84	.74	0.88
しつけ	3.76	.64	3.58	.88	1.60
指導情熱	3.35	.72	3.58	.76	1.86

3.2.5 音楽経験による差の検討

ピアノや電子オルガンなどの部活動以外の音楽の習い事の経験による差は、因子 I 「親しみやすさ」下位尺度 ($t(254)=2.14, p < .05$)、因子 II 「しつ

けと厳しさ」下位尺度 ($t(254)=1.03, n.s.$)、因子 III 「指導のうまさと情熱」下位尺度 ($t(254)=0.83, n.s.$) のいずれについても有意な差はみられなかった (表11)。

表11 音楽経験の違いによる平均値と SD, t 検定の結果

	習い事あり		習い事なし		t 値
	平均	SD	平均	SD	
親しみ	2.75	.77	2.95	.71	2.14 *
しつけ	3.55	.94	3.66	.75	1.03
指導情熱	3.50	.78	3.58	.74	0.83

* $p < .05$

3.3 音楽観測定尺度の分析

3.3.1 因子分析結果

結果の分析にあたっては、それぞれの質問の回答に対して1点から5点の得点を与え、逆転項目の処理をした上で平均値と標準偏差を求めた。そして天井効果の見られた8項目を除外し、残りの19項目に対して主因子法による因子分析を行った。固有値の減衰状況と因子解釈の可能性から3因子構造が妥当であると考えられた。そこで再度3因子を仮定して主因子法・バリマックス回転による因子分析を行った。その結果、因子負荷量の絶対値.40以下や複数の因子の負荷量が同程度になる1項目を分析から除外し、再度、主因子法バリマックス回転による因子分析を行った (表12)。

第1因子は、「部活動以外の様々な音楽も楽しんでみたい」という音楽観の拡大を表す項目とともに「人格形成に役立つ」「人間の生活を豊かにし潤いを与える」「音楽家は尊敬できる人が多い」「音楽的能力は大きな価値がある」などの音楽の価値や有用性にかかわる項目からなるので、「音楽の有用性」因子と命名した。

第2因子は、「音楽そのものよりもコンクールで演奏する曲に興味がある」「音楽そのものよりも部活動で参加するコンクールに興味がある」「音楽よりも部活動で担当している楽器(パート)に興味がある」という、コンクールや自分の担当パートにかかわる項目からなるので、「コンクールとしての音楽」因子と命名した。

第3因子は、「興味や遊びに過ぎない(逆転項目)」「演奏したり歌ったりして楽しむものに過ぎない(逆転項目)」「音楽家は音楽以外の常識に欠ける(逆転項目)」「音楽家は気分で行動する人が多い」な

表12 音楽観測定尺度の因子分析結果

音楽観測定尺度の項目	有用性	コンクール	価値	共通性	
部活動以外の様々な音楽も楽しみたい。	.69	-.12	.01	.49	
音楽は人間形成に役立つ芸術である。	.65	-.10	-.02	.44	
音楽は人間の生活を豊かにし潤いを与えるものである。	.63	-.21	.00	.44	
学校教育において音楽の授業は大切だと思う。	.58	.19	.17	.41	
自分にとって音楽は気分転換やストレス発散になるものである。	.57	-.09	.02	.33	
自分にとって音楽は、仲間づくりや人との出会いの場を提供してくれるものである。	.56	.14	.09	.34	
音楽の授業は他の授業よりも楽しいと感じる。	.53	.23	.14	.36	
音楽は、自分にとって将来音楽関係の仕事に就きたいと考えるくらい大切なものである。	.49	.20	.14	.29	
音楽家には尊敬できる人が多い。	.48	.20	.13	.30	
すぐれた音楽の能力は大きな価値があると思う。	.44	-.15	-.01	.22	
音楽家は音楽以外でも優れた能力を持つ人が多いと思う。	.41	.19	-.03	.20	
音楽そのものよりも部活動のコンクールで演奏する曲に興味がある。	.01	.80	-.09	.65	
音楽そのものよりは部活動で参加するコンクールに興味がある。	.08	.60	-.06	.37	
音楽というよりは部活動で担当している楽器（パート）に興味がある。	.02	.54	-.06	.30	
音楽は人間にとって趣味や遊びの一つに過ぎないものである。	.29	-.17	.55	.41	
音楽は演奏したり、歌ったりして楽しむものに過ぎないと思う。	.21	-.33	.50	.23	
音楽家は音楽以外の社会的常識に欠ける人が多いと思う。	.07	-.04	.47	.40	
音楽家は気分で行動する人が多いと思う。	-.19	.08	.44	.23	
(*は逆転項目)	因子寄与	3.56	1.76	1.07	6.39
	寄与率	19.79	9.80	5.92	35.50

どからなっており、「音楽の価値」因子と命名した。

3.3.2 下位尺度間の関連

因子分析の結果から抽出した三つの下位尺度に相当する項目の平均値を求め、「音楽の有用性」得点（平均3.79, *SD* 0.58）、「コンクールとしての音楽」得点（平均2.68, *SD* 0.78）、「音楽の価値」得点（平均3.28, *SD* 0.62）とした。三つの下位尺度は因子Ⅰ「音楽の有用性」と因子Ⅲ「音楽の価値」、因子Ⅱ「コンクールとしての音楽」と因子Ⅲ「音楽の価値」においてそれぞれ有意な正の相関を示した。内的整合性を検討するために各下位尺度の信頼性を求めたところ、Cronbachの α 係数は、第1因子が $\alpha = .82$ 、第2因子が $\alpha = .73$ と十分な信頼性が得られたが、第3因子は $\alpha = .56$ にとどまった（表13）。

表13 音楽観下位尺度間相関

	有用性	コンクール	価値	平均	<i>SD</i>	α
有用性	—	.11	.18	3.79	.58	.82
コンクール		—	-.18**	2.68	.78	.73
価値			—	3.28	.62	.56

** $p < .01$

3.3.3 吹奏楽部、合唱部の差の検討

吹奏楽部、合唱部の差を検討するために、各下位尺度得点について t 検定を行った。その結果、因子Ⅰ「音楽の有用性」下位尺度（ $t(282) = 2.06$, $p < .05$ ）については、吹奏楽部よりも合唱部の方が有意に高い得点を示していた。因子Ⅱ「コンクールとしての音楽」下位尺度（ $t(282) = 2.74$, $p < .001$ ）については、吹奏楽部の方が合唱部よりも有意に高い得点を示していた。因子Ⅲ「音楽の価値」下位尺度（ $t(282) = 1.96$, *n.s.*）については吹奏楽部よりも合唱部の得点が高く、有意傾向にあった（表14）。

表14 所属別の平均値と*SD*、 t 検定の結果

	吹奏楽		合唱		t 値
	平均	<i>SD</i>	平均	<i>SD</i>	
有用性	3.76	.58	3.97	.54	2.06*
コンクール	2.74	.75	2.25	.83	3.70
価値	3.26	.63	3.47	.54	1.96

* $p < .05$ ** $p < .001$

3.3.4 男女差の検討

男女差を検討するために、各下位尺度得点について t 検定を行った。その結果、因子Ⅰ「音楽の有用

性」下位尺度 ($t(282)=2.08, p<.05$) については男子よりも女子の方が有意に高い得点を示していた。因子Ⅱ「コンクールとしての音楽」下位尺度 ($t(282)=0.95, n.s.$)、因子Ⅲ「音楽の価値」下位尺度 ($t(282)=0.99, n.s.$) については有意な差はみられなかった(表15)。

表15 男女別の平均値とSD, t検定の結果

	男子		女子		t 値
	平均	SD	平均	SD	
有用性	3.63	.61	3.82	.57	2.08 *
コンクール	2.58	.78	2.70	.78	0.95
価値	3.20	.65	3.30	.62	0.99

* $p<.05$

3.3.5 音楽経験による差の検討

ピアノや電子オルガンなどの部活動以外の音楽の習い事の経験による差は、因子Ⅰ「音楽の有用性」下位尺度 ($t(282)=2.64, p<.01$) については、音楽の習い事の経験がある方が有意に高い得点を示した。因子Ⅱ「コンクールとしての音楽」下位尺度 ($t(282)=2.55, p<.05$) については音楽の習い事のない方が有意に高い得点を示した。因子Ⅲ「音楽の価値」下位尺度 ($t(282)=0.47, n.s.$) については有意な差はみられなかった(表16)。

表16 音楽経験の違いによる平均値とSD, t検定の結果

	習い事あり		習い事なし		t 値
	平均	SD	平均	SD	
有用性	3.89	.54	3.71	.60	2.64 **
コンクール	2.55	.71	2.79	.82	2.56 *
価値	3.30	.66	3.27	.58	0.47

* $p<.05$ ** $p<.01$

4 考察

本研究は、音楽系部活動に所属する高校生を対象とした「部活動適応感」「顧問の指導」、そして音楽系部活動部員に特有と思われる「音楽観」を測定する尺度を作成し、結果の分析を通して音楽系部活動の指導の改善に資するための示唆を得ることを目指した。

質問紙1では、「向上心」「居心地」「顧問とのかわり」「人間関係」「部活動からの逃避」の5因子が見出された。また、 α 係数は第1因子が.75、第2因子が.78、第3因子が.78、第4因子が.69、第5因子が.73であった。これにより『音楽系部活動

測定尺度』は一定の信頼性を有しているものと考えられる。

下位尺度の検討からは、「向上心」「居心地」「顧問とのかわり」「部活動からの逃避」が正の相関を示していた。この結果は、桂、中込¹⁶らの導き出した部活動の適応感を規定する要因とほぼ一致していた。このことは、音楽系部活動においても、その指導改善の方策を運動部に求めることが可能であることを示唆する結果といえる。

所属の別による差の検討からは、合唱部の得点が「顧問とのかわり」「人間関係」について有意に高い得点を示していた。また、「向上心」と「居心地のよさ」については有意差は認められないが、合唱部の得点が高く、有意傾向にあった。このことから、今回の調査結果においては顧問や他の部員との関係について合唱部の方が満足感を感じていることが分かる。しかし、今回の調査協力校のうち合唱部は少規模校が多いこと、すべて女子部員であったことなど、データの偏りによる影響も考えられる。

音楽経験の有無による差では、すべて逆転項目で構成された第5因子「部活動からの逃避」について音楽経験のある方が有意に高い得点を示していた。したがって、部活動以外の音楽の習い事を経験した生徒は、音楽経験のない生徒に比べ部活動の適応感が高いと考えられる。

質問紙2では、「親しみやすさ」「しつけと厳しさ」「指導のうまさと情熱」の3因子が見出された。 α 係数は第1因子が.90、第2因子が.87、第3因子が.89であり、この尺度の十分な信頼性は保証されたといえる。この三つの因子は互いに正の相関関係にあり、指導にあたっては、顧問の人的な親しみやすさとともに、校則などの生徒指導的な事柄についての妥協しない指導、音楽的指導力、教育的情熱の三つが必要であり、それらの総合的な作用によって指導の効果が高まることを示唆する結果となっている。

所属の別による差の検討では因子Ⅰ「親しみやすさ」、因子Ⅱ「指導のうまさと情熱」について合唱部が有意に高い得点を示していた。男女差は認められなかった。また、部活動以外の音楽経験の有無によって教師に対する「親しみやすさ」の感じ方に有意差が認められた。音楽以外の習い事の経験がある生徒は、自身のピアノの教師などと部活動の顧問教員を比較して捉えていることを示唆する結果となっている。

質問紙3では「音楽の有用性」「コンクールとしての音楽」「音楽の価値」の3因子が見出された。 α 係数は第1因子が.82, 第2因子が.73, 第3因子が.56であり, 一定の信頼性は得られたが, 今後の追試と検討が必要である。

下位尺度の検討からは、「コンクールとしての音楽」と「音楽の価値」の間、「音楽の有用性」と「音楽の価値」の間のそれぞれに正の相関がみられた。

所属別の差の検討では「音楽の有用性」について合唱部が有意に高い得点を示し、「音楽の価値」についても得点は高く有意傾向にあった。特に, 両者の音楽観の違いを浮き上がらせたのが、「コンクールとしての音楽」下位尺度である。吹奏楽が有意に高い得点を示し, コンクール指向の強さをうかがわせる結果となった。男女差については「音楽の有用性」について女子の方が有意に高い得点を示していた。

部活動以外の音楽経験の有無による差では, 音楽経験のある方が「音楽の有用性」について有意に高い得点を示した。一方, 「コンクールとしての音楽」については音楽経験のない方が有意に高い得点を示し, 音楽経験によってコンクールに対する見方や考え方が異なることを示唆する結果となった。青木¹⁷はスポーツ継続年月が競技スポーツへの態度・意識を高め, スポーツ観を高めることを明らかにしており, スポーツと音楽の違いはあるが, 継続的な音楽経験が音楽観の高まりにつながる事が推察される。

以上のことから得られた知見を下記に示す。

第1は, 運動部の指導の改善の方策が音楽系部活動の指導の改善の方策としても活用できる可能性があること。

第2は, 合唱部は吹奏楽部に比較して顧問とのかわりや部員の人間関係に満足感を得る傾向にあること。

第3は, 部活動以外の音楽経験がある部員は部活動への適応感が高いこと。

第4は, 指導する顧問の人的な親しみやすさや指導力, 教育的情熱, それらに裏打ちされた教育的厳しさは相即不離の関係にあり, バランスのよい指導が生徒からの共感につながる事。

第5は, 合唱部所属の生徒や部活動以外の音楽経験のある生徒は, 音楽の価値や有用性を真摯に捉えているが, それに対し吹奏楽部や音楽経験の少ない

生徒はコンクール指向が強いこと。

しかし前述のとおり, これらの知見には, 今回の調査協力者は吹奏楽部が多かったこと, 合唱部については少規模校が多かったこと, また全て女子部員であったことなど, データの偏りによる影響も考えられる。一般化するためには今後の継続的に広範な研究が必要であると考えられる。

5 今後の課題

今回の研究で用いたデータは, 女子に大きく偏っていた。この点については地域や学校選択について更なる検討と工夫が必要であろう。一般に音楽系部活動は女子の比率が多いものと思われるが, 女子に特有の傾向をより詳細に調べていくことも効果的かもしれない。

今回はA県のみでの調査であったが, 今後はより広い範囲で継続的に研究を進めていく必要がある。また, 対象を吹奏楽部と合唱としたが, 他の音楽系部活動も対象に含めていかななくてはならない。それらのすべてに貢献できる有意義な知見を得ることは困難であるとしても, 可能な限り広く継続的に積み重ねをしていくことが重要と考える。

これまでの学校教育における吹奏楽部や合唱部の活動は, 演奏の質や技能の向上, またその延長にあるコンクールの結果によって活動の是非が問われる場面が多かったように思われる。本研究の一番の成果は, 筆者および調査協力校の指導者に, 音楽系部活動の指導の改善について, 生徒の部活動適応感から取り組むことの意識が芽生えたことかもしれない。

今後は継続的に実証的なデータを積み重ねていくことによって, 音楽系部活動の諸問題を体系的に研究していきたい。

【謝辞】

本研究を進めるにあたり, 調査に協力いただいた各校の顧問, 生徒のみなさんに心からの感謝を申し上げます。また, 質問紙の作成から回収まで協力をいただいた大学院生の武藤美夕紀さんと鈴木智子さんにも心からの感謝を申し上げます。

[注と文献]

- 1 文部科学省の調査では、生徒の8割が部活動を「楽しい」(中学生83.4%, 高校生83.8%)と感じ、教員も8割が「やりがいを感じる」(中学校教師88.4%, 高校教師87.7%)と答えている(文部科学省『運動部活動の在り方に関する調査研究報告(平成9年12月)』<http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/sports/001_toushin/971201.htm#1-3>2008年1月22日)。
- 2 文部科学省, 同上。
- 3 青木邦男「高校運動部員の社会的スキルとそれに関連する要因」『国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要』第5号, 2005, pp.25-34。
- 4 角谷詩織「部活動への取り組みが中学生の学校生活への満足感をどのように高めるか」『発達心理学研究』第16巻1号, 日本発達心理学会, 2005, pp.26-35。
- 5 吉村斉「学校適応における部活動とその人間関係のあり方—自己表現・主張の重要性—」『教育心理学研究』45, 日本教育心理学会, 1997, pp.337-345。
- 6 桂和仁, 中込四郎「運動部活動における適応感を規定する要因」『体育学研究』35, 日本体育学会, 1990, pp.173-185。
- 7 全日本吹奏楽連盟「登録加盟団体数」<<http://www.ajba.or.jp/kameidantai2007.pdf>>2008年1月15日。
- 8 文部科学省「学校基本調査(指定統計第13号)」<http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/index01.htm>2008年1月15日。
- 9 NHK 全国学校音楽コンクール—コンクールの歴史<<http://www.nhk.or.jp/event/oncon/>>2008年1月15日。
- 10 吹奏楽の学会である日本管打吹奏楽学会の研究紀要は1991年から発刊されているが、そのうち楽器の奏法や音楽的な内容以外の論考はほとんどみられない。
- 11 吉村斉「部活動への適応感に対する部員の対人行動と主将のリーダーシップの関係」『教育心理学研究』53, 日本教育心理学会, 2005, pp.151-161。
- 12 青木邦男「高校運動部員のスポーツ観とそれに関連する要因」『体育学研究』48, 日本体育学会, 2003, pp.207-223。
- 13 坂西友秀「フォロアーのパーソナリティー特性の関数としてのリーダーシップ効果」『教育心理学研究』37, 日本教育心理学会, 1989, pp.107-116。
- 14 吉村, 前掲書。
- 15 青木, 前掲書。
- 16 桂, 中込, 前掲書。
- 17 青木, 前掲書。

Summary

The purpose of the present paper is to report on an attempt to develop a scale measuring the adaptability of senior high school students to extra-curricular activities which they join. It was expected that the result would help improve instructions in school settings. A questionnaire

was prepared to measure three areas of adaptability; the sense of being adapted (31 items), the supervisor's method of instruction (35 items), and the views towards music (27 items). The questionnaire was sent to a total of 288 students, including 46 male and 242 female of the first year and second year students in Akita prefecture. All the students were members of the brass band club or the chorus club. Factor analysis was administered on the responses to each of the three sets of questionnaire items. For the first group of items (adaptability), five factors were extracted, including 'a desire for improvement,' 'a sense of being at home in the circle,' 'relationship to the supervisor,' 'relationship with other members,' and 'escape from the circle.' Three factors were extracted for the second group of items (the supervisor's method of instruction), and the factors included 'approachableness,' 'discipline,' and 'teaching skills and enthusiasm.' The last group of items (views toward music) was found to consist of three factors, including 'usefulness of music,' 'music as a competition,' and 'the value of music.' The results of the analysis based on these factors revealed the following tendencies among students' attitudes towards extracurricular activities: 1) those students who had had learned music some way or other prior to joining the circle at school tended to be more adaptable to extracurricular activities at school than those who had had no such experiences previously; and 2) as there is a strong relationship between various teacher factors, such as approachableness, enthusiasm, and discipline, a balance needs to be struck between these factors to help students spend time effectively in various extracurricular activities.

Key Words : Extracurricular Activities in Music, Senior High School Students, Extra-Curricular Activities, Adaptability, Factor Analysis

(Received January 28, 2008)